

7 診断用義歯を適用した咬合位不安定症例について

○本田 岳史 (生体技工専攻5回生), 野村 章子, 丸山 満, 伊藤 圭一, 植木 一範
(歯科技工士学科), 高見 大介 (附属歯科診療所歯科技工室), 小倉 英理 (附属歯科診療所)

【はじめに】患者担当制による臨床技工実習において、咬合位の不安定な難症例を経験した。治療内容と客観的データを取り入れた経過観察について報告する。

【症例の概要】患者は85歳男性で、他の診療所で何度義歯を新製しても満足が得られず、本診療所を受診した。主訴は義歯の不適合と下顎顎堤粘膜の疼痛であった。残存歯は2+7に歯冠修復物、上顎歯牙欠損部には部分床義歯、下顎には全部床義歯を装着していた。咬合位が不安定で、咀嚼時に下顎義歯を動揺させ、下顎顎堤粘膜に広範囲の義歯性潰瘍が認められ、疼痛を訴えていた。

【治療方針】咬合位の安定化と義歯の動揺防止のため、下顎に診断用義歯(前歯部のみ人工歯排列、臼歯部はスプリント様の咬合様式)を適用した。義歯装着後の経過観察で、義歯調整、噛み合わせトレーニングを行い、さらに咬合位の安定化を客観的に評価するため前後の水平被蓋量を計測した。

【計測方法】経過観察中に5回と最終義歯装着中に1回の計測を行った。義歯装着時の口腔内にて、中心咬合

位の上下前歯部位置関係をバイト用シリコンにて記録後、正中から1遠心へ3mmの位置で切断し、水平被蓋量を読み取り顕微鏡を用いて3回測定を行った。平均値を測定値とし、咬合採得時からの変化を比較、検討した。

【結果と治療効果】水平被蓋量は咬合採得時を基準として、診断用義歯装着時には前後±0.2mmの範囲で安定が認められ、最終義歯移行後は0.06mmとさらに近似した値が得られた。このことから咬合採得時の顎位が適正であったことがわかった。咬合位でも咬合接触点の収束化から安定化が認められた。義歯性潰瘍および疼痛も著しく減少した。最終義歯は上顎旧義歯の人工歯交換、下顎診断用義歯に人工歯排列の修理を行い完成とした。

【まとめ】良好な経過が得られたことで、咬合位が不安定な症例では、適正な咬合位を求め、症状の改善を待ち、最終義歯の製作を行うことが重要であると理解した。

8 シリコンを用いた研究用模型

○伊藤 圭一, 野村 章子, 丸山 満 (歯科技工士学科), 高見 大介 (歯科技工室),
塩田 孟紀, 本田 岳史 (生体技工専攻5回生)

【はじめに】生体技工専攻では、患者担当制による臨床技工において、従来のアルジネート概形印象により製作した研究用模型の代わりに、使用義歯からシリコン複印象により研究用模型(UDシリコン模型)を製作する方法を新たに導入したので報告する。

【方法】使用材料には技工用重縮合型シリコン印象材(タイタニウム, セルマック社)を用いた。物理的性質はショアA硬さ92, 細部再現性2μm, 重合時間6分であった。模型製作では、まず粘膜面側にシリコンを圧接した後に、使用義歯形態を広範囲に再現するため唇頬側面, 舌側面のコアーを人工歯が覆われる位置まで採得した。

【結果】「シリコン模型が与える利点」

チェアーサイド: 使用義歯の診査時に、顎堤に対する人工歯の位置関係や床の外形を明確に観察することが可能となった。また、使用義歯の形態を再現したトレーは良好な吸着状態で、モデリングコンパウンドによる筋圧形成が不要なほど口腔内で安定していた。そ

のため、より機能的な印象採得と、治療時間の短縮を図ることができた。

ラボサイド: 特殊な器具や装置を用いず、作業場所を限定しないため、技工室以外に診療室内において患者の近くで模型製作を行うことができた。適度な弾性を有しているため、石膏では難しい床辺縁部から粘膜面側にかけてのアンダーカット域を、簡便に再現することができた。さらに、唇・頬側面コアーを用いることで、使用義歯の研磨面形態をトレー表面に再現することもできた。使用義歯を用いる本術式の場合は、一般的な模型材料である石膏に比べて、作業時間が短いシリコン材料が適していた。

【まとめ】UDシリコン模型から製作した個人トレーを使用することで、簡便かつ確実に印象採得を行うことができた。今後は、附属歯科診療所の全部床義歯ケースにおいても応用を期待している。そして、本術式の工夫・改善を行い、より質の高い補綴物製作に貢献したいと考えている。